

人形浄瑠璃

文楽

二〇二五年三月 地方公演

昼の部

二人三番叟

絵本太功記

夕顔棚の段
尼ヶ崎の段



夜の部

近頃河原の達引

四条河原の段
堀川猿廻しの段



文化庁

主催 公益財団法人文楽協会 助成 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会 / 朝日新聞文化財団

令和7年 3月7日[金] ●昼の部 14時開演 [開場は各回
●夜の部 18時開演 [開演30分前]
高崎芸術劇場 スタジオシアター

チケット発売日
11月8日[金] 10時~
Web発売

[全席指定]
S席 4,000円
A席 3,000円 (U-25 1,000円)

[昼夜通し券]
S席 7,000円
A席 4,000円

チケット購入方法

Web 11月8日[金] 10時~
高崎芸術劇場メンバーズ限定(登録無料)
<https://takasaki-foundation.or.jp/theatre/>

電話 11月12日[火] 10時~
高崎芸術劇場チケットセンター
027-321-3900 (10:00~18:00)

窓口 11月13日[水] 10時~
高崎芸術劇場チケットカウンター
ほか 高崎市施設プレイガイド

主催 高崎芸術劇場 (公益財団法人 高崎財団)

*未就学児の入場はご遠慮ください。*U-25料金は公演当日25歳以下の方が対象です。当日年齢のわかる身分証明証をご持参ください。*公演中止の場合を除き、一度購入されたチケットの払い戻し、交換はいたしかねますのでご了承ください。*車椅子席、介助席のご購入は高崎芸術劇場チケットセンターまで電話でお申し込みください。

二〇二五年三月 地方公演 配役表

昼の部

解説（あらすじを中心に）

豊竹陸太夫

二人三番叟

（人形役割）

三番叟豊竹靖太夫	三番叟桐竹紋吉
三番叟竹本碩太夫	三番叟吉田玉誉
竹澤團吾	
鶴澤友之助	
鶴澤燕二郎	
鶴澤藤之亮	

絵本太功記

夕顔棚の段

（人形役割）

豊竹陸太夫	母さつき 桐竹勘壽
竹澤團七	妻操 吉田襲二郎
ニケ崎の段	線初菊 桐竹紋臣
切竹本千歳太夫	鶴澤友之助
豊澤富助	武智光秀 吉田玉助
	武智十次郎 吉田玉輔
後豊竹靖太夫	百姓大ぜい い
野澤勝平	軍兵大ぜい い

囃子 望月太明蔵社中

夜の部

解説（あらすじを中心に）

竹本織太夫

近頃河原の達引

四条河原の段

（人形役割）

伝兵衛豊竹陸太夫	構端官左衛門 桐竹紋秀
官左衛門豊竹咲寿太夫	仲買勘藏 吉田玉彦
勘藏竹本織栄太夫	井筒屋伝兵衛 吉田玉佳
スハ竹本碩太夫	廻しのスハ 吉田玉翔
鶴澤清丈	稽古娘おつる 吉田和馬
	与次郎の母 吉田文昇

堀川猿廻しの段

前竹本織太夫	猿廻し与次郎 吉田玉也
鶴澤藤蔵	娘おしゅん 吉田和生
鶴澤友之助	駕籠屋 大ぜい い
後豊竹呂勢太夫	
鶴澤燕三	
鶴澤燕二郎	

囃子 望月太明蔵社中

二人三番叟

能で特に神聖視される『翁』を義太夫節に移し、慶事に上演される『寿式三番叟』。その中から二人の三番叟の舞を独立させました。義太夫節ならではの力強い響き。人形の躍動的な舞。足遣いの踏む足拍子と三番叟が振る鈴の音も心地よい、熱気あふれる舞台です。

絵本太功記 夕顔棚の段・ニケ崎の段

明智光秀が京都の本能寺に宿泊中の織田信長を滅ぼした「本能寺の変（1582）」を題材とする時代物で、寛政11年（1799）、大坂の道頓堀若太夫芝居で初演。当時刊行中の読本『絵本太功記』の人気を受けて、近松やなまはかが合作し、発端に1日を1段として、光秀が謀反を決意する6月1日から命を落とす13日までの13段が続く構成になっています。

忠臣光秀は、「鬼の再来」と恐れられる主君春長の悪逆を諫めて、度重なる屈辱的な仕打ちを受け、6月2日ついに本能寺を襲撃。光秀にとっては万民を救うための天謀でしたが、母さつきは、主殺しなど断じて許せず、6日、逆賊との同居は汚らわしいと、ひとり京を去り、ニケ崎へ。

謀反を知り、急遽、備中から軍勢を率いて都へと引き返す久吉。ニケ崎の近くで待ち受ける光秀勢。10日、さつきのもとを訪れたのは、光秀の妻操と息子十次郎、その許嫁の初菊。そして、宿を乞う旅僧も。その正体を久吉と察し、様子をうかがう光秀に気づく老母。

討ち死覚悟の十次郎が、悲しみを胸に初菊との祝言をあげ、出陣したあと、旅僧は、さつきに勧められ、風呂へ。外から竹槍で突く光秀。ところが、中にいたのは母。主殺しの罪深さを思い知らせるため、わざと息子の手にかかったのです。そこへ味方の敗北を告げに戻った十次郎は、絶命寸前。一夜も添うことなく夫と死に別れる初菊。我が子を失う操、二人の慟哭…。光秀は、涙も束の間、天王山での決戦を久吉と約束するのです。

兵庫県尼崎市を舞台とする「ニケ崎」は、天下のための拳兵が家族に悲劇をもたらした光秀の苦悩と悲しみが胸に迫る、全編の山場です。

近頃河原の達引 四条河原の段・堀川猿廻しの段

京の二条河原での心中（1702?）で知られたおしゅん・伝兵衛に、四条河原での刃傷沙汰と貧しい猿廻しが親孝行で褒賞されたことを絡めたとされる、三巻の世話物で、眼目は中の巻の「堀川猿廻し」。気はやさしくて臆病者、文字は読めなくても誠実に生きる猿廻しの与次郎を中心に、その日暮らしの貧しさの中、互いに思いやる家族と、その別れを描いています。天明2年（1782）、江戸の外記座で初演され好評を博したこの段は、大坂で上演されたある時代物の猿廻しのくんだりをもとにしたものですが、作者、成立等、作品全体についての確かなことはよくわかりません。

大名の御用を勤める伝兵衛は、相思相愛の祇園の遊女おしゅんに横恋慕した出入先の侍を殺してしまい、お尋ね者に。

おしゅんの兄、猿廻しの与次郎は、目の見えない病身の老母を大切に世話する孝行息子。伝兵衛との関係で店からひそかに美家に戻された妹のことも、心配でなりません。母もまた同じ思い。伝兵衛が心中しに来たら…。二人はおしゅんを死なせまいと、伝兵衛への離縁状を書かせ、一安心。

その夜、現れた伝兵衛に妹の手紙を突きつける与次郎。ところが、それは母と兄に宛てた書置きでした。あくまでも伝兵衛と死ぬ覚悟のおしゅん。残された家族の嘆きを思い、一人で死のうとする伝兵衛。けれども、大事な夫を見捨てては、女の道が立たないと、おしゅんは聞き入れません。

その思いに心動かされ、母は娘を伝兵衛と行かせることに。与次郎はめでたい猿廻しで二人を送り出すのでした。

「そりや聞こえませぬ伝兵衛さん」に始まるおしゅんのクドキや、悲しみの漂う猿廻し（華やかな旋律に乗せて、人形遣いが左右の手で一体ずつ猿を遣います）で有名な、人気演目です。

◎字幕表記がございます。席によっては字幕が見えにくい場合がございますので、あらかじめご了承ください。
 ◎出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくは演目を変更して上演する場合がございます。あらかじめご了承ください。
 ◎上演中、各座席内での写真撮影・録音録画ならびに携帯電話・スマートフォン・タブレット等の使用は固くお断りいたします。また周りのお客様の観劇の妨げになりますので上演中はお待ちください。また周りのお客様の観劇の妨げになりますので上演中はお待ちください。また周りのお客様の観劇の妨げになりますので上演中はお待ちください。また周りのお客様の観劇の妨げになりますので上演中はお待ちください。
 ◎観劇時は咳エチケットの励行ならびに手洗いなどの感染症対策にご協力のほどお願い申し上げます。